

ジョージア (グルジア) 便り その31

『スペインツアー合間の息抜き』

文 高野陽年 text by Yonen Takano



ログローニョのバル通りで働く人々。

地図もなし、インターネットもなしに僕はログローニョの街を彷徨った。毎年恒例のようにあるスペインツアーも終盤に差し掛かり、バスに乗っては移動し、公演する毎日の憂さを晴らしに、夕日の暮れた街へ繰り出したのだ。この街はスペインの北部に位置し、リオハワインやサンティアゴの巡礼道の重要な都市として名高い。教会から延びる細い路地には小さなバルが立ち並び、真冬だというのに外に出てワイングラスを片手に談笑する人々で溢れかえっている。軒先のテーブルに置かれたタパスが僕らの空の胃袋を刺激し、頭がふらついた。

スペインは他のヨーロッパと違い英語がほとんど通じない。店員や客が笑顔で店に誘って、タパスの説明なんかをしているようだが、さっぱりわからない。普段だったら何が出てくるかわからない店は遠慮するところも、串刺しになった生ハム、コロッケ、アンティチョークを小さなスペースでワイン片手に頬張る姿は、ガード下の焼き鳥屋を思い浮かばせ、なんだ

か親しみが湧いてきて、僕らも知らぬうちにタパスを片手にサッカーの中継を眺めていた。

しかし中継が終わり午後7時を過ぎたばかりだというのに段々と人影がまばらになった。多くのバルがドアを閉め始めている。さっきまで昼間のシエスタ(昼寝休憩)で店を閉めていたというのに、ジョージア時間もびっくりのスペインの時間感覚である。夜9時頃にまたレストランとしてオープンするようだがそれまで何をするあてもなく、曲がりくねる細い路地をさらに奥へと入り込んだ。

お腹が満たされた僕は少し街並みを見て帰るつもりであったが、トビリシや東京の街の入り組み方と違い、教会や砦を中心に扇状に広がる路地は迷路のようですっかり迷ってしまった。同じような所をぐるぐる回っているようでホテルに戻るタクシイもなかなか見つからない。薄暗いシャッターの閉まった路地は気味が悪いので、明るく人だかりができてくる所を目指した。すると徐々に軽快なマーチが聞こえてきた。僕はステップを踏みながら音楽の聞こえる方へ急ぐと、松明、花束とろうそくを持った中世の衣装を着た隊列に出くわした。後ろにはプラスバ

ンドが続いている。彼らの眼差しは真剣そのものである。伝統を守ろうとする強い意志がひしひしと伝わってきて、僕は中世の街へタイムスリップしてしまっただかと思った。甲冑や民族衣装を着た彼らは街を回るように行進した後、教会の門で身だしなみと隊列を整え、神妙な面持ちで中へと入っていった。詳しくはわからないがクリスマス前の待降節の中の行事なのだろう。

明日はログローニョからバレンシアへとラマンチャ地方を通り南下する。ラマンチャはドンキホーテの出身地でもある。気づけばトビリシでのドンキホーテの舞台が一週間後に迫っている。彼のスピリットをバスの中から感じ、舞台の構想を練ることにしよう。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

